中学校

平成6年度

教育研究員研究報告書

道　徳

東京都教育委員会

平成６年度

教育研究員名簿（道徳）

分科会名	区市町村名	学校名	氏名
第一分科会	千代田	一橋中学校	◎大塚雅利
	文京	文林中学校	清水一久
	板橋	加賀中学校	小野博之
	江戸川	小松川第三中学校	橋本裕子
	立川	立川第八中学校	須崎光太郎
	青梅	第1中学校	○当間一則
	府中	府中第六中学校	岡田博
	武蔵村山	第二中学校	鈴木千徳
第二分科会	台東	竜泉中学校	○石塚弘
	江東	深川第七中学校	遠藤直人
	品川	伊藤中学校	森田正蔵
	大田	貝塚中学校	池田富太郎
	荒川	第七中学校	飯島和弘
	足立	花畑北中学校	関根克洋
	町田	成瀬台中学校	宇野頼子
	八丈	富士中学校	牧口弘一

◎　世話人　　○　副世話人

担当　教育庁指導部主任指導主事　谷合明雄

研　究　主　題

人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導

目　　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　内容項目３―(1)「畏敬の念」についての指導（第１分科会） …… 3

1　主題設定の理由 …… 3

2　研究の内容と方法 …… 4

(1)　内容項目３―(1)のとらえ方 …… 4

(2)　生徒の実態の把握と各学年のねらい …… 5

(3)　指導方法の工夫 …… 7

(4)　指導事例 …… 9

3　まとめ …… 11

Ⅲ　内容項目４―(3)「理想的な社会の実現」についての指導（第２分科会） …… 13

1　主題設定の理由 …… 13

2　研究の内容と方法 …… 14

(1)　内容項目４―(3)のとらえ方 …… 14

(2)　生徒の実態調査 …… 15

(3)　各学年の指導のねらい …… 18

(4)　指導方法の工夫 …… 18

(5)　指導事例 …… 20

3　まとめ …… 23

Ⅳ　まとめと今後の課題 …… 24

研　究　主　題

人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導

Ⅰ　研究主題設定の理由

現代社会は、情報化社会といわれている。私たちを取り巻く高度な情報化の波は、これから育ちつつある子供たちの生活や心身の発達に大きな影響を与えている。遠くの出来事が身近の出来事のように伝わる便利さの裏で、氾濫する多くの情報に振りまわされ、方向を見失い主体性を失ってしまうこともその一つである。

この高度に進んだ機械文明の社会は、最近になって、残虐な事件やモラルの低下を思わせるごみ投棄、環境問題の多発等を生み、学校でもいじめ、登校拒否など生徒の人格形成上の課題を数多く残したことは周知の通りである。

本来、人は人との関わりの中で、人間性を養い、豊かな人間性を育みその人格を形成していくものであるが、現代の情報化社会の中にあっては、多くの情報が居ながらにして得られるため、逆に、人と人との関わりを持ちにくくし、孤立化の傾向を強めている。これらの傾向は、心の荒廃、道徳的価値観の喪失、そして人間性の崩壊へとつながっていくといっても過言ではない。このような状況の中で、学校教育、特に道徳教育に求められているのは、人間としての生き方についての自覚を深めさせるとともに、生徒一人一人に自らの人生を自らの力で切り拓いていく力を養わせる指導であるということができる。

中学時代は、心身ともに発達が著しく、感受性も豊かで、他からの影響を受けやすい時期であり、他者との連帯も深めながら、自我意識を高めていく時期でもある。そして、これまで価値判断を他者に依存していた時期を脱し、自らの価値観で自分自身の生き方を手さぐりで捜しながら自己を確立し、心を育てていこうとするのである。このような機会をとらえて、人間としての生き方を考え、自己と他者との関係を望ましい方向に高めつつ、自らの内によりよく生きる力を育てるための指導、援助が重要な課題となってくるのである。

上記の課題に応えるために、道徳の時間の指導では、人間としての生き方についての自覚を深める指導を通して、生徒の感受性を育て、豊かな心を育み、自らを高めていこうとする道徳的実践力を育成していくことに主眼を置いていくが、その根底には、常に人間尊重の精神を基盤とした生徒の心の内面の充実が必要なのである。

以上の理由から、研究主題を「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導」と設定した。そして第一分科会は自然や崇高なものとの関係の中で、人間としての生き方を考えることに視点を置いた内容項目３―(1)「畏敬の念」を、第二分科会では、人間や社会との関係の中で、正義・公正・公平という意味を考え、偏見や差別のない社会の実現や社会連帯の精神を培うことを主眼とした内容項目４―(3)「理想的な社会の実現」をそれぞれ取り上げた。

各分科会では、内容項目のとらえ方の検討、アンケートなどによる生徒の実態把握、指導資料の収集と分析、指導過程や指導方法の検討等を研究授業における生徒の反応も参考にしながら研究・協議し、生徒の心に響く指導の在り方を求めて工夫していくことを通して、研究主題に迫っていこうと考えたのである。

Ⅱ　内容項目３―(1)「畏敬の念」についての指導（第１分科会）

１　主題設定の理由

科学技術の進歩や経済の発展により、私達の回りにはものがあふれ、生活はますます豊かで便利になってきた。しかしその反面、機械優先・物質至上主義の風潮が支配的となり、人々の生活は自然と一体となった生活から徐々に遠のいていく傾向にある。そして、自然に対して横柄となり、謙虚さを忘れかけている。

自然には本来、人間の豊かな情操や感性を育み、私達が生き生きと健康的な生活を営む上で、その役割は計り知れないほど大きなものがある。歴史的に見ても、日本人は四季折々の豊かな変化に富む自然に触れ、親しみ、巧みに生かし、「花鳥風月」に代表される我が国独特の文化を築き上げてきた。

しかるに、現在の自然破壊や自然喪失の生活は人々の心を貧しく荒廃させ、我が国特有の文化や伝統の継承や発展を難しいものにしている現状がある。そしてその影響は、生徒達の日常の学校生活の中でも多々見受けられるようになってきた。

人間は、自然の雄大さ、神秘さ、美しさ、不思議さ、恐ろしさなどに触れる時、心は震え動かされる。また自然の驚異に圧倒される時、自己の存在の小ささや有限性を肌で感じ、思わず頭を垂れ、素直で敬虔な気持ちになり、しばし我を忘れることすらある。自然と触れ合い、自然を愛し、自然をあるがままに受け入れることは、私達の心を育み、人間としての豊かな生き方には不可欠である。

昔は日が暮れるまで外で遊びまわり、自然に触れる機会が多かった。そしてその体験から多くのことを学ぶと同時に、心を耕し、豊かにしてきた。しかしその自然も、開発による都市化の進行により、破壊や汚染が進んでいる。今では遊び場としての自然は減少し、子供達が思い切り自然の中で遊ぶ姿は見られなくなった。また学歴偏重の風潮に伴う通塾する生徒の増加や、人間関係の希薄化、テレビゲームなどが、生徒の自然と触れ合う機会の減少にさらに拍車をかけている。

しかしその反面、現在は絵画、音楽、彫刻、演劇、文芸などのいわゆる芸術のもつ美しさに触れる機会は増大している。

このような生徒をとりまく社会的背景や、柔軟で多感な中学生の発達段階を考えたとき、自然と人間との触れ合いの大切さをじっくりと考えさせ、体験させることが必要である。また、芸術などの美しいものに対する感受性や情操を育てることも極めて重要なことである。そのような指導、援助を通して、人間の生存に欠かすことのできない豊かな恵みをもたらす自然を愛し、美しいものに感動する美的情操を身につけ、人間の力の及ばない自然や崇高なものをありのままに受入れようとする豊かな心の育成が可能になってくると考える。

以上のことから、第１分科会では、「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導」として、内容３―(1)「自然を愛し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。」を取り上げ、内容項目のとらえ方、生徒の実態把握、資料の収集・検討、指導方法や指導過程等の工夫について研究を進めることにした。

2　研究の内容と方法

(1)　内容項目３―(1)のとらえ方

内容項目３―(1)は、「自然を愛し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めるようにする。」（中学校学習指導要領　道徳）である。

中学生の時期には、音楽、絵画、映画などの芸術作品の美に感動したり、親、友人、知人などの人間の行為や心の美しさに心を開くようになる。さらに、感受性が深まると、広く人間社会をとりまく、空、山、海などの美しい自然に対しても感動するようになる。このような時期に、美的情操を深め感動する心を育てることは、豊かな心を育てることにつながり、人間としての成長の基盤となる。しかし、現在は人間が自然から遠のき、機械文明によって心の歪みや心の荒廃が目立つようになった。このような時代だからこそ、自然の中にある美しさに感動する心を養うことは大切である。人間は自然に感動し、人間と自然との関わりを追求していくと、『人間が有限なものである』ということを自覚せざるを得ない。このことを通して、人間は、人間の力を超えたものを感じとる心が深まっていき、ここに人間の力を超えたものに対する畏敬の念が芽生えてくる。こうして人間は心を豊かにし、自他の生命の大切さや尊さ、人間として生きることのすばらしさなどを自覚するようになり、とかく独善的になりがちな自己を反省し、生きとし生けるものに対する感謝の心、人類愛の心や自然愛の心などを身につけていくのである。

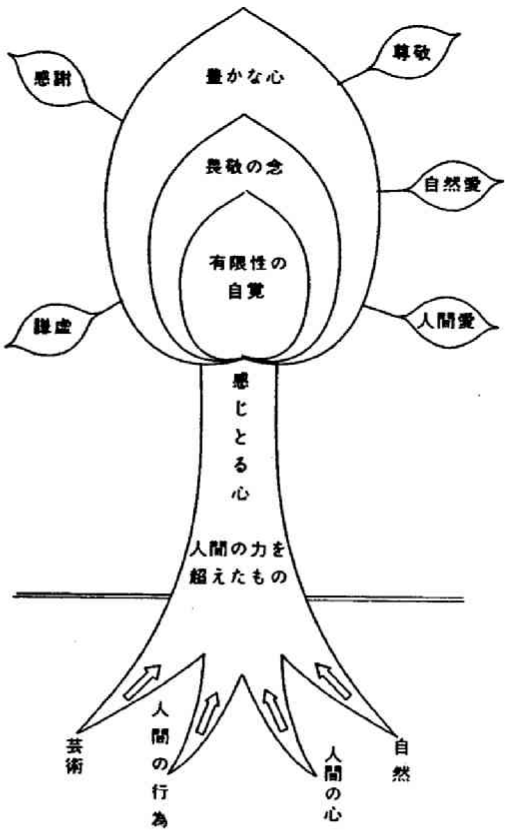
さて、人間を木にたとえてこの内容をとらえてみると、まず土の養分としては、音楽、絵画、映画などの芸術作品、家族、友人などの人間の行為の美しさ、人の心の美しさ、空、山、海などの美しい自然などが考えられる。

この養分を根から幹に吸い取るのであるが、幹は感じとる心を表わす。これらの養分を吸い取り、一体化すると、人間の力を超えたものを感じるという養分を得ることができる。

この養分は、幹の中で有限性の自覚という層に発展し、さらには畏敬の念、豊かな心という層に重層的に深まっていくのである。

この「豊かな心」という層ができあがると、この木は、生きとし生けるものに対する感謝の心の実や尊敬の心の実、自然愛の心の実などを付けるのである。

以上述べてきたことを構造図に表すと図１のようになる。



〔図１〕

(2) 生徒の実態の把握と各学年のねらい

内容項目３―(1)「畏敬の念」について、中学生の実態を把握するためにアンケートによる実態調査を実施した。

ア　調査期間　平成６年７月上旬

イ　調査地域　千代田、文京、板橋、江戸川、立川、青海、府中、武蔵村山

ウ　調査人数　１年生 251 名、２年生 237 名、３年生 201 名　計 689 名

設問(1)　「あなたはどんな時に、最も喜びを感じますか。」

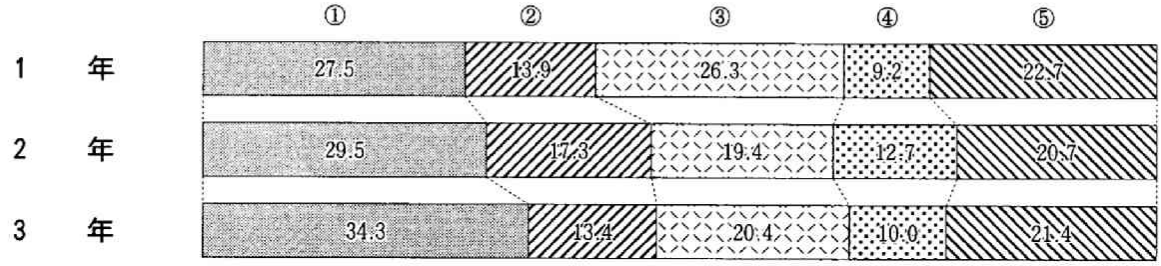
① テストで良い点をとったり、わからない問題が解けたとき。

② 委員会やクラブ活動などで頑張ったとき。

③ 他の人からほめられたり、認められたとき。

④ 好きな人やあこがれている人のことを思うとき。

⑤ 自然の中でおもいっきり遊んだとき。



この調査では「感動する心」の前段階の一つとして「喜び」を感じるのはどのようなときかについて調査した。自分自身に関すること（自己理解①、愛情④）、学級や学校の活動に関すること（②）、他の人や自然に関すること（人間から③、自然から⑤）の５つの答を用意した。

②、④、⑤については、学年によってそれほど差がないようだが、学年が上がるにつれて①の自己理解が深まることに「喜び」を感じるものが増え、それにつれて③の他人から認められることへの喜びが減少傾向にある。

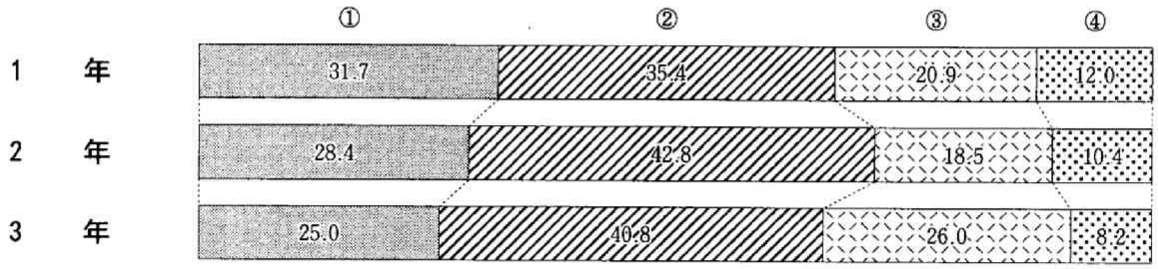
設問(2)　「あなたが最も感動するのはどんなときですか。」

① すばらしい音楽、絵画、文学などに出会ったとき。

② 空、山、海など美しい自然と解れ合ったとき。

③ 家族、友人など人との触れ合いのなかで人間の行為や心の美しさを感じたとき。

④ 新しい生命の誕生に出会ったとき。



この調査では「喜び」等の感情が発展し、「感動」につながるのはどのようなときかを調べた。この回答として感動する対象を芸術的なものに対して（①）、自然に対して（②）、人の行為に対して（③）、生命の神秘さに対して（④）の４つの内容にした。

学年が上がるにつれ、芸術的なものについては減少し、人の行為に対してはわずかではあるが増加をしている。どの学年も「自然との触れ合い」を一番にあげており、生徒の実体験を通して感動する場面から「畏敬の念」へと指導を進めるには、自然を題材としたものが適していると思われる。

設問(3)　「あなたは自然と人間との関わりについてどう考えますか。」

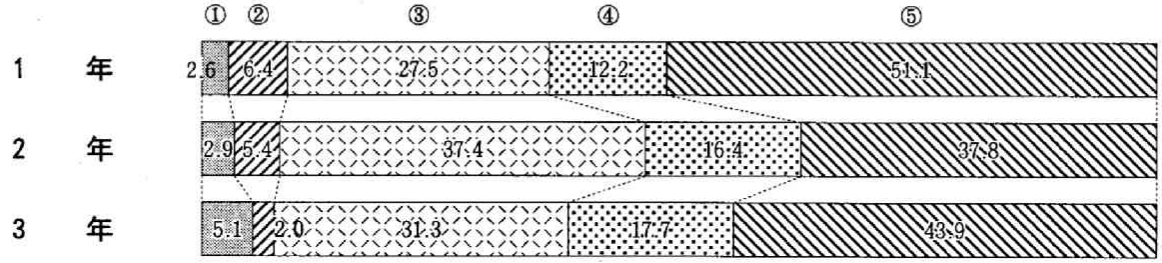
① 自然は人間の作った物に比べると、たいしたことはない。

② 人間は公園を作ったり緑を増やす努力をしている。

③ 人間は自然から恵みを受けている。

④ 人間は地震や台風などの前では無力である。

⑤ 自然は何万年も続いていて自然の力はすごいと思う。



この調査では、「畏敬の念」の対象として「自然」を考えた場合に、「自然と人間の関わり」をどうとらえているかを調査したものである。その回答として、自然より人間を優位としたもの（①）、自然との共存を図るための人間の努力を認めたもの（②）、自然から恩恵を受けているもの（③）、自然を恐怖の対象と考えるもの（④）、自然に対する畏敬の気持ち（⑤）の５つにした。

この結果から、人間優位と考える生徒はほとんどなく自然優位と考え、また、④のような自然に対して破壊的で恐怖なものとしてとらえるのではなく、「恩恵」などの良いイメージでとらえている生徒が多いことがわかる。

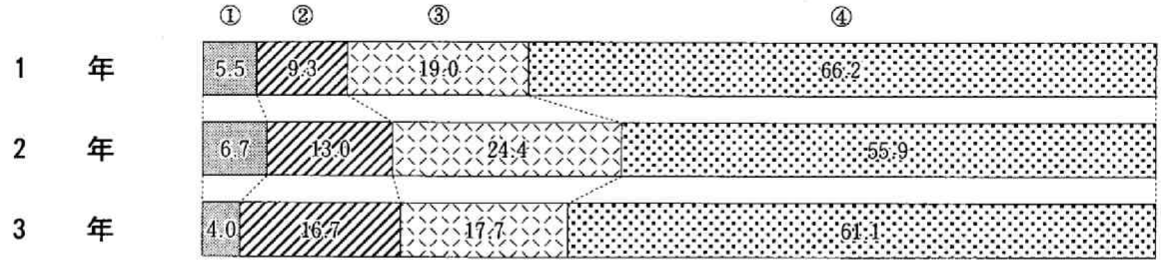
設問(4)　あなたは「人間が生きている」ということについてどう考えますか。

① 自分が生きているのだから他のことは関係ない。

② 生きていること自体すごいと思う。

③ 人間は他の動植物によって支えられて生きているので、他の動植物といたわりあっていきたい。

④ 自然がなくなったら人間は生きていけないので、もっと自然を大切にしたい。



この調査では我々が「生きる」ことと「自然」とのかかわりをどうとらえているかを調査したものである。設問は、利己的な考えのもの（①）、ただ「すごい」としてとらえるもの（②）、他の動植物と共存（③）、自然優位（④）の４つを中心に考えた。

利己的な考え方は少なく、また「自然との共存」よりも「自然があってこそ人間が生きていける」と考えている生徒が約６割おり、③④あわせれば、約８割の生徒が、人間が生きるためには自然が必要だと考えている。

以上のような実態把握に基づき、各学年の指導のねらいを次のように設定した。

第１学年　自然を愛し、自然の美しさに感動する豊かな心情を養う。

第２学年　自然の美しさや神秘さについて関心を深め、人間の力を超えたものを大切にしようとする意欲を育てる。

第３学年　自然と人間のかかわりあいについて考え、人間が有限なものであるという自覚にたって、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めるようにする。

(3)　指導方法の工夫

①　資料選定の観点

第１分科会では、内容項目３―(1)「畏敬の念」の指導に供する資料を中学校指導書道徳編（平成元年３月　文部省）Ｐ59に示された内容を踏まえるとともに、次の諸点に留意しつつ選定した。

(ア)　教師自身が資料に感動し、心魅かれる内容であること。

(イ)　生徒が理解しやすく、自分自身の体験や経験と照らして考えやすい内容であること。

(ウ)　生徒が道徳的心情や判断力を高める手掛かりとなる内容であること。

(エ)　自然や美しいものに感動する豊かな心、崇高なものや人間の力を超えたものに対して畏敬の念を深めてゆくことへの意識付けの契機となる内容であること。

以上の観点にたって資料を収集し、検討した結果、文部省　道徳教育推進指導資料（指導の手引き）３所収の「小雪と椎の木」を選定した。

②　授業の構想

内容項目３―(1)は、「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」の中に示されている項目である。人間が長い歴史を築き上げてきた中で、自然の美しさを感じる心や自然と親しむ気持ちが私達の生活を豊かにしてきたといえよう。しかし、社会が大きく変化してきている現代のなかで、中学生が十分自然に接しているかどうか、疑問がある。

文明社会の中で人々が自然から遠のいているとすれば、自然が今までと変わらず美しくあっても、見る人の心自体が感じることができなくなってしまうだろう。指導書によれば「人間としての生き方を考え、自然との関わりを追求していけば、人間は有限なものである、ということを認めないわけにはいかない。このことを通して、人間の力を超えたものを素直に感じとる心が深まり、ここに人間の力を超えたものに対する畏敬の念が芽生えてくるであろう。」と、ある。

生徒の実態や内容項目を検討した結果、人と自然とが大きな関係を持っていることを生徒に理解させ、さらには、その自然が大きな力を持っていることを生徒が感じとることができるように授業を展開してゆくことが重要になってくることが明らかになった。

③　資料の提示及び指導の工夫

資料を検討していく過程で、資料の根底に流れている自然と人間との一体感を生徒に理解させる指導をどのように展開するかということが議論となった。それは、自然と人間との一体感が十分理解された上で、自然の大きな力を感じることができると考えたからである。そのため内容の読みとりに時間がかかることを考慮し、授業は二時間扱いとした。

第一時は、画用紙に一枚絵（場面の絵）を描かせ、感想を発表しあうことで資料理解を深めさせた。第二時にはテープに吹き込んだ資料を読み聞かせながら絵を提示することとした。家族愛に引きつけられる生徒が多いと感じたので、ねらいをしっかり設定し発問も十分吟味する必要があると考えた。

(ア)　導入

教師の作成したテープを聞かせながら一枚絵を提示した。生徒自身が描いた絵であるので、感情移入がしやすかったようである。

(イ)　展開

主人公の気持ちや周囲の自然を生徒が感じとることができるように発問した。生徒の気持ちや思いを多く聞き合えるように工夫し、お互いの考えを深めることができるように配慮した。

(ウ)　終末

ここまで発表したことをまとめながら、一人一人の考えや受け取り方が違うことを説明し文章にまとめさせた。

④　資料の内容

本資料は、小雪という少女が祖父の死に際し心を沈ませるが、椎の木の大木や杉の木の精に勇気付けられ、生きる力、以前の明るさを取り戻すという物語である。

民話風の物語を通して、自然の中で生き生きと生活する小雪の姿、祖父の死に際して、「私もおじいさんの所へ行きたい」と、悲しむ小雪の姿がしっかりと描かれ、読む者の心を引き込んでゆく。

心を沈ませ、ふさぎ込む小雪に対して、「そんなに嘆いてばかりいたら、権三じいさんが悲しむよ。」と、諭すように話しかける椎の木の言葉で元気を取り戻してゆく小雪の姿を生徒は十分感じることができるであろう。

〔あらすじ〕

ある山深い里に小雪という少女が住んでいる。小雪は杉の木の精や椎の木と話すことができる。毎日、山で下草刈りに精をだし、祖父と二人で楽しく暮らしていた。

ところが、祖父が急死する。小雪は、嘆き、悲しむ。そんなとき、山の椎の木はやさしく話しかける。しばらくして、元気になった小雪の心のなかには、以前にも増して椎の木が大きな存在となっている。

(4) 指導事例（第２学年）

① 主題名　畏敬の念（内容項目３―(1)）

② 資料名　「小雪と椎の木」

文部省　道徳教育推進指導資料（指導の手引き）３所収

③ 主題設定の理由

人間が文明を築く上で、失ってしまったものが数多くある。普段そのことに気付かず、便利さばかりを追い求めてしまっている。この地球が、私たちを含めた多くの生命や輝きに満ちあふれるためには、人間は独善的であってはならないし、謙虚にならなければならないだろう。さらには、動物、植物、全ての生命をかけがえのないものとしてとらえ、自然を愛する心や人間の力を超えたものに対して神秘さを感じとる心が必要であると考え、本主題を設定した。

④ ねらい

自然や美しいものに感動する豊かな心を持ち、崇高なものや人間の力を超えたものに対して畏敬の念を深めさせたい。

⑤ 指導過程

	指導の流れと主な発問	期待される生徒の反応	指導上の留意点
導入	1　録音しておいた資料を聞かせ導入とする 一枚絵の提示 （資料理解）	○　第１時よりも深く考えている。	○　村に住んでいる人々になったつもりで考えさせたい。 （感情移入）
展開	2　資料に即して考える。 ①　小雪にとって、小鳥達や椎の木はどんな存在だと思いますか。	○　心の拠り所としている。 ○　周りを取り囲んでいる。 ○　暮らしを見守ってくれている。 ○　とても大きな存在だ。	○　小雪の周りを取り囲んでいる様子。自然との一体感を感じさせたい。
	②　椎の木が諭していることはどんなことだと思いますか。	○　椎の木も弱ってきた。 ○　命はいずれは終わるものである。	○　自然をも含めどんなものでも命には限りがあること。有限

展 開	（周囲の生徒と話し合ってみてもよい） ③ （三年後の）小雪の心の中に新しく生まれてきたものはなんでしょうか。	○ 自然というものにも命がある。 ○ 励ましてもらった。 ○ 包んでくれている。 ○ 自然から愛されている。 ○ 自然から勇気づけられている。	性について考えさせる。 ○ 人間の力を超えた大きな力が存在すること。その力を感じることができるよう考えさせる。
終 末	3 自分の感じ方や考えをワークシートに記入し、まとめとする。 ○ この資料を通して感じたことや考えたことをまとめてみましょう。 （ワークシート） （時間によっては発表させる）	○ 自然があるから人間も生きて行くことができる。 ○ 自然の凄さなど、人間の力を超えているものがある。	○ 小雪のように自然から受けている影響をとらえさせる。自分の周囲に目を向けさせたい。

⑥ 評価の観点

(ア) 自然や美しいものに感動する豊かな心を持ち、崇高なものや人間の力を超えたものに対して畏敬の念を深めさせることができたか。

(イ) 2時間扱いにしたこと、絵を描かせたこと、テープを利用したことが、効果的であったか。

⑦ 授業の概要および研究協議会のまとめ

教師が音読したテープを流しながら、生徒の描いた絵を提示した。2時間扱いのため、資料の内容は理解できていたと推測できる。

(ア) 自評

- 「畏敬の念」を深めるためには、自然の力を大きいと感じること、人間は自然から大きな力を受けているんだということを、理解させることが重要であると感じた。
- 授業中はずっと生徒の描いた一枚絵を張っていたのでそれを見ながら発表でき、生徒は発表しやすかったようである。
- 生徒の意見の取り上げ方を今後の課題としたい。

(イ) 研究協議および改善点

- 生徒の中からねらいにかかわる発言やいきいきとした発言がたくさんでて良かった。
- ねらいにかかわる発言をさらに深める発問ができれば良かった。
- まとめの中に教師の言葉を入れて行っても良かったのではないか。
- 発問の③「小雪の心の中に新しく生まれてきたものはなんでしょうか。」がわかり

にくかったので検討の余地がある。

研究協議を通して以上のような意見がでた。

⑧ 生徒の反応（抜粋）

○ 小雪はお祖父さんが死んでしまってとても悲しんだけれども、椎の木に支えられていることに気付いたと思う。・・中略・・小雪はとても感謝していると思う。（女子）

○ 椎の木が優しく語りかけてくれる場面が、とてもあたたかい物語だと思った。小雪が死ぬまで元気でいられるようにと願いを込めている椎の木の気持ちが、ゆっくり読んでいくと分かると思う。（男子）

○ 小雪は、お祖父さんを失ってしまったけれど、そのことによって成長したのではないかと思う。権三じいさんの死はむだではなかったと思う。（女子）

○ 小雪は、生きていく強さや大切さを椎の木に教えられたから生きていく希望を持ち続けることができたんだと思います。また、椎の木が言いたかったことは、「人間は永遠のものではないけれど、人の想いはずっと続くものだ。」ということではないでしょうか。（女子）

⑨ 考察

本授業を通して、人間と自然にかかわる生徒の意識の段階は、次のようになっていると考えた。

ア） 人間が普段気付かず過ごしている中に、自然から受ける恩恵、眼には見えない力の存在があることを感じていくこと。（人間の力を超えたものを感じとる力）

イ） 人間の力はに限りがあることに気付くこと。（有限性の自覚）

ウ） 自然は素晴らしいと心の中に湧き上がってくるなど、自然の中で生きていると感じること。（自然との一体感）

エ） 感じとった内容が心の糧となり、心を耕すもととなること。（豊かな心）

この授業を通して感じることは、自然に対してその人の生き方や実体験が大きく関与しているということである。まったく自然とかかわっていないという人間は存在しないと言えるだろう。ところが、日頃自然とかかわっていることに気付かずに過ごしている人間も多くなってきている。したがって、日常活動の中で、どれだけ多く自然とかかわるかを感じることが、豊かな心を築き上げていく基盤となっていくと考えられる。

生徒の感想を求めてみると、椎の木に代表される自然が、大きな力を持っているということを生徒は感じとることができたと考える。しかしながら、さらに一歩踏み込んで、畏敬の念へと結び付ける段階までは指導を深めることができなかった。

今後の研究の中で、畏敬の念への指導の結び付け方、深め方などをより実証的に検討していきたいと考える。

3 まとめ

一般的に豊かな感受性が育ち、人生をより豊かに生きていこうとする自覚も高まってくる中学生のこの時期に、内容項目３―(1)「自然を愛し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めるようにする。」について指導することは、

きわめて重要であると考え、この内容項目のとらえ方、指導の在り方等について研究を進めてきた。

古来、人間の存在にとって自然は不可欠の条件であり、常にその恵みの中で生活を営んできた経緯がある。人間は、宇宙を含めた大自然の雄大さ、悠久な姿にあこがれ、人間の力を超えたその神秘性に畏敬の念を持ち続けてきた。古くから、日本人は、四季折々の変化に富んだ自然の恵みに感謝し、畏敬の念を深め、自然との一体感を求めて生活してきた。また、一方、日常生活においては自然のみならず、他人の行為や心の美しさに強く感動したり、書画・彫刻・工芸などの美術作品や、演劇・音楽・芸能などの芸術活動のすばらしさに心を打たれることもしばしばある。このような日常遭遇する自然や生活の中での感動の体験をもとにして、人としての道は探られ、その人の人となりは形成されるのである。

激しく変化する現代社会に生きる人間は、ふと立ち止まって、自然との関係や人と人とのかかわりについてゆっくり考える時間的な余裕に恵まれているとは言えない。しかし、他人の何気ない心遣いに心を和ませたり、身近な人の死に直面し、人間の命のはかなさを感じることもある。また、素晴らしい芸術作品に触れたとき、驚嘆し感動することさえある。さらに、無限に広がる宇宙や広大な自然の前では、人間の矮小性を痛感せずにはいられず、思わずひれ伏したくなる。このような経験によって、人間は限りなく多くのものによって支えられていて、それらとのかかわりにおいて初めて生存し得ることを知り、人間が有限であることを自覚するのである。この有限であることを認識した時、心の中に自然に生まれる謙虚な気持ちが、人間を超えたものに対する畏敬の念である。人間の有限性を自覚し、人間の力を超えた崇高なものに思いをよせる心情・態度をもって生きることが、より豊かな心を育成することと深くかかわってくるのである。

研究を進めるに当たり、生徒にアンケートを行ったところ、自然に対するイメージとしては、「人間は恵みを受けている」「自然によって生かされている」等に回答が集中した。また、どのような場面で感動するかという項目では、「自然との触れ合い」を挙げる生徒がどの学年も最も多かった。このことは、「畏敬の念」へとつなげる感動資料としては、自然を題材としたものが適していることを示唆している。そこで、十数編の資料を検討した結果、文部省道徳教育推進指導資料第3集から「小雪と椎の木」を選定し、授業を通して深めてきた。本資料の主価値は、自然との一体感、生命の有限性であると考えられるが、ともすると生徒たちは、関連価値である家族愛の方に目を向けがちであるため、この点に留意して、授業を構成した。

自然との触れ合いが減り、他者とのかかわりが薄れ、様々な生活体験が不足している生徒たちに道徳の時間だけの追体験によって、本項目のねらうところすべてを身に付けさせることは困難である。奉仕や自然体験学習、飼育栽培活動等との関連を図りつつ、日々の学級活動で醸成されるよりよい人間関係の中で、生徒の心情に訴えかけ、教師も共に考え、感動を高める授業を展開することが大切である。豊かな心は、豊かな体験を通して育まれるが、道徳の時間に本項目を通し豊かな情操を育成していくことは、人間としての生き方についての自覚を深めるために、きわめて重要な役割を果たすと考えられる。

Ⅲ　内容項目４―(3)　「理想的な社会の実現」についての指導（第２分科会）

１　主題設定の理由

人間は家庭、地域、学校・職場といった様々な集団社会に所属し生活している。その集団社会がよりよいものであることは、誰もが願うことである。しかし、現代社会では、よりよい社会の実現に向けて、どれだけの人がどれだけの努力をしているといえるだろうか。人間は、個人としての欲求や願望を追い求めるあまりに、時には他人を蹴落としてまでも自己の利益に走ってしまうことがある。自分さえ良ければいいという考えや、このくらいならかまわないだろうといった行動、そして、他人への迷惑はなんとも思わないといった言動がよりよい社会の実現を阻止しているのである。このような自分本位の考え方を排し、誰に対してもいつも相手の立場や考えを理解し、お互いに尊重することを通して、よりよい社会を実現しようと努める気持ちが育つように指導していくことが重要である。

現代の中学生は、よりよい仲間や学級・学校をつくっていこうと、日々その努力をしている。仲間に気を使ったり、学級・学校のために自分を奮い起たせて、学校生活における諸活動で精一杯頑張っている。しかし、時と場合によっては、普段と違った一面を露呈することがある。まず、人によって公正・公平な態度を変えてしまうこともあるということである。親しい仲間にはどうしてもあまくなったり、相手によっては不正や不公平があっても見逃してしまったりするのである。このことは、他の人に対して偏った見方をしているわけで、不正を許してしまうことにもつながっていきかねない。次に、自己中心的な考え方や言動をとりがちなことである。自分に直接関係のないことに対しては、無関心であったり、見て見ぬふりをすることがある。また、自分の役割を果たせば、あとはお構いなしといった傾向もある。このことは、自分さえよければ、周囲がどうあっても構わないという利己心の現れである。このようなことでは、所属している集団社会はまとまらず、そこからは信頼関係や思いやりの気持ちなど生ずるはずがないのである。

さらに、観念的には物事の善し悪しを判断できるものの、それを実践に移すとなると勇気が伴わずに断念してしまうことがある。正義を重んずるということは、正しいことを自ら積極的に実践に移せることである。自分が不利になるからとか、自分をよく見せたいという気持ちで、正しい考えや行動が押しつぶされてしまっては困るのである。

中学生の時期は、以上述べてきたように、自分の考えや立場に固執するあまりに、他から学ぼうとする謙虚さや誠実さに欠けてしまい、集団の中でも意見の対立や摩擦を生んでしまいやすいのである。

指導に当たっては、所属する集団社会の目指すものをしっかりと認識させ、誰に対しても公正・公平に接するとともに、社会連帯の精神をもって、あらゆる偏見や差別のない、よりよい社会の実現に努めるよう指導していく必要がある。

以上のことから、第２分科会では「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導」として、内容項目４―(3)「理想的な社会の実現」を取り上げ、内容項目のとらえ方、生徒の実態、資料の検討、指導方法などについて研究を進めることとした。

2　研究の内容と方法

(1)　内容項目４―(3)のとらえ方

内容項目４―(3)は、「正義を重んじ、だれに対しても公正・公平にし、社会連帯の精神をもって差別や偏見のないよりよい社会の実現につくすように努める。」（中学校学習指導要領　道徳）である。

この内容に即して、現在の中学生の実態を探ってみると、社会のしくみや社会問題に関心を持ち始める時期であり、社会の不正や道理に反することに対しては憤りを感じ、批判的な気持ちを深めてくるのである。しかし、一方においては、人の弱点をからかったり、勉強や運動の苦手な人をばかにしたり、遊び感覚や安易な考えで差別的な言動をとったりすることも見受けられる。また、そのような場面に出会った時、見て見ぬ振りをしたり、できれば避けて通ろうとする消極的な姿勢もみられる。そして、他人の行動には厳しいが、自分や自分の仲間のことになると途端に判断があまくなり、損得を考え、この程度ならいいという考えをする生徒も出てくるのである。

こうした生徒の状況を生み出す背景としては、生徒の考える正義が一人よがりのものであったり、他人より優位にいたいという自分本位の考えであったり、自分の所属する狭い仲間集団での連帯であったりすることが考えられる。

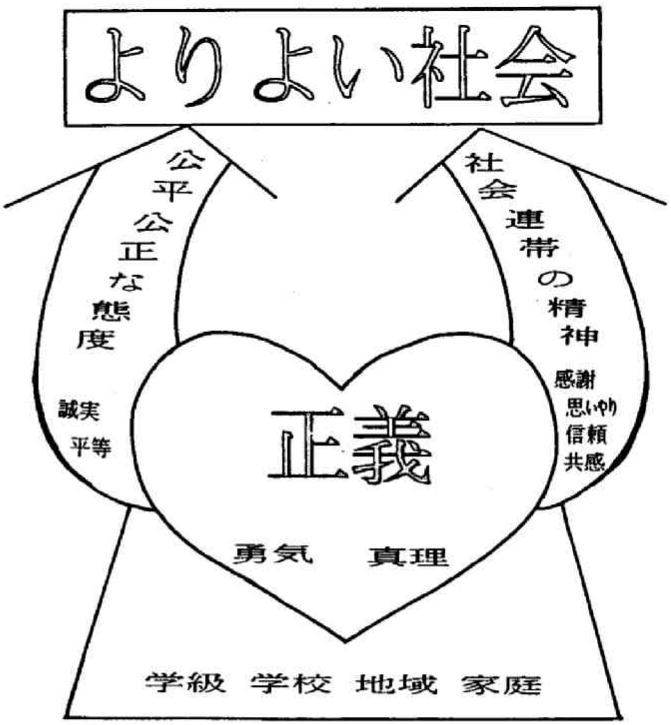
そこで、一人一人が尊重され平等に認め合い、生きる喜びを感じるよりよい社会の実現に尽くすような人間を育てるには、狭い仲間意識を打破し、不正を憎み、偏見・差別を断固として許さず、正しいことを貫く勇気とそれを実践する心を育てることが大切である。

社会から様々な偏見や差別を排除したよりよい社会を実現するためには、まず、心の中にある弱い心を払拭し、学校、家庭、地域等の場で、勇気と真理に裏打ちされた正義の心を十分養っておく必要がある。

その上で、この正義の心から生まれる感謝・信頼・共感・思いやりといった社会連帯の精神と、誠実・平等を含めた公正・公平な態度を養い、よりよい生き方を求めて積極的に実践しようとするたくましい人間を育てていく必要がある。

こうしたたくましい人間の和に基づく不断の努力によって、社会から様々な偏見や差別を排除したよりよい社会は形成されてくるのである。

これらのことを構造図として示すと図２のようになる。



〔図２〕

(2) 生徒の実態調査

道徳の時間の指導のねらいの設定に役立てるため、生徒の実態をアンケートを通して探ることにした。アンケート項目は、「社会連帯の精神」に関連することがら、生徒の生きがいや生活感覚が分かることがらなどである。ここでは特に研究主題である社会連帯の精神に関することについて考察する。

1 私は、B組に所属し運動会の審判を努めています。学級対抗の得点種目では各クラスの力が伯仲し、最後のリレーで優勝が決まるという大接戦となりました。リレーは、これまでのところ、自分のクラスであるB組がトップで走っています。しかし、最終ランナーは、バトンを受けた後、ラインを越えてトラックの内側を走ってしまいました。レースはそのままB組が1位でゴールしました。B組応援席では、優勝したことの喜びで湧き返っています。

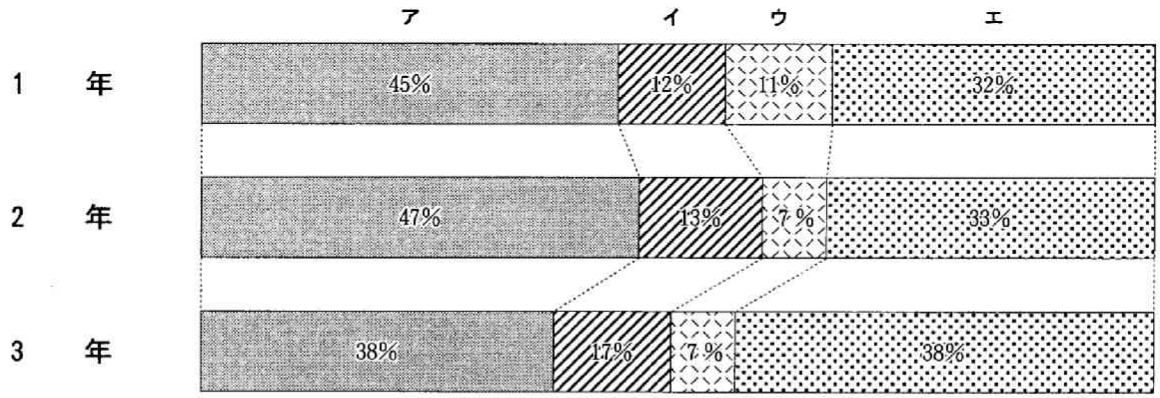
質問1：この時、審判であるあなたはどうしますか。

ア　正直にB組の違反を報告する。

イ　クラスの優勝のため黙っている。

ウ　正直に言うと、みんなから非難されるので黙っている。

エ　他の審判から指摘があったら報告する。

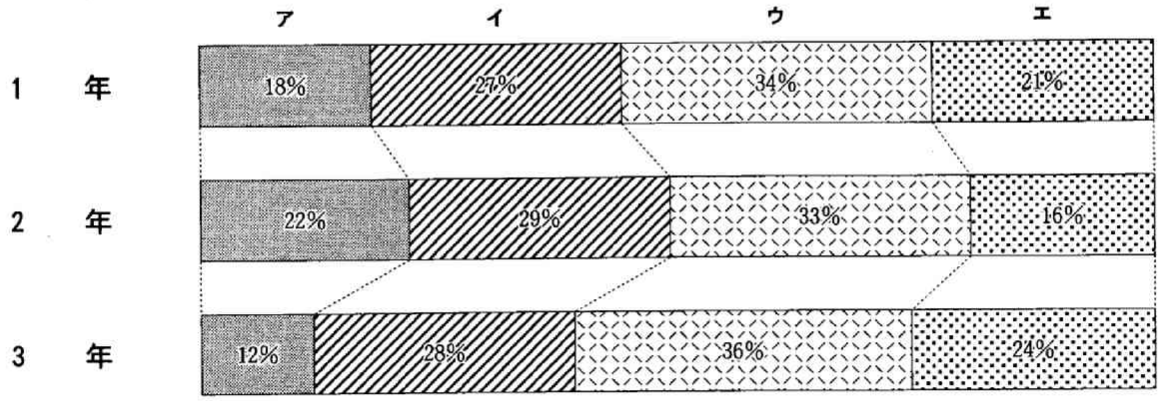


ルールの違反を正直に報告するという生徒が、各学年で40%前後もおり、正しいことを正しいとして正義を実践する意識をもっていると判断できる。一方、イ～エの設問に見られるように、黙っていてそのまま済ませようとする生徒が半数近くあり、価値判断が自分本位であったり、自分が所属する集団にこだわる傾向が見られる。その一面でいけないことだという気持ちもあり、「他から指摘されたら報告する」という生徒も学年が上がるに従って増えている。

質問2：「うそをつくことは・・・・」について。「・・・・」部分にあなたの考えをつなげるとしたら、次のア～エのどれに最も近いですか。

ア　理由はどうあれ、悪いことだ。

イ　理由によっては、やむを得ないことだ。
ウ　理由によっては、うそをついたほうがよい場合もある。
エ　人間の弱い一面であり、しかたのないことだ。



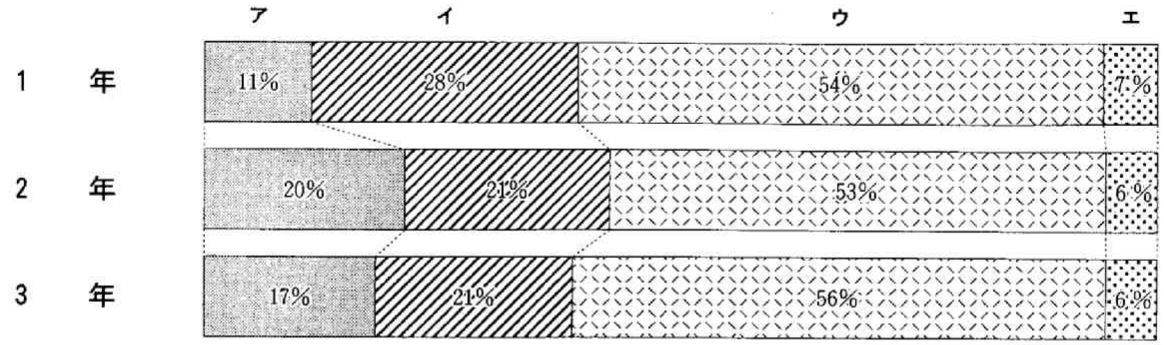
「うそは悪いことだ」と考える生徒は、2年生が最も多く意識が高いと言える。しかし、3年生になるとその割合が低下する。イ、ウを選び「理由によっては、うそをついた方がよい、あるいは、しかたのないことである。」と考える生徒が1～3年生のどの学年にも60%近くいる。このことは、アンケート項目1の結果に見られるとおり、生徒自身は正義を通そうと考えているが、「ガン告知」の問題にみられるように、「患者の気持ちを考えれば告げない方がよいとする考え方」と「嘘をつくことは悪いことだ」というように、両方ともプラスの価値に対峙し、その選択を迫られたときには、それまでの人生観や人間としての生き方に照らして総合的に判断していこうとする意識の現れと推察できる。

2

バスの中で乗客の一人に喫煙を注意された男が、その注意した乗客に乱暴を働いている。他の乗客は、見て見ぬ振りをしている。バスの運転手はたまりかねてバスを交番の前に停車し、警察官に通報したのでこの男はその場で逮捕された。その後、喫煙を注意したために乱暴された乗客は、「自分が困っているのに、見て見ぬ振りをしていて何もしてくれなかった」と、警察官に他の乗客を全員逮捕して欲しいと頼んだ。

質問：電車やバスの中で、いわゆる車内暴力が幅を利かせて、不愉快な思いをしたことがあると思います。ここに示した逸話は、非現実的で架空な話ですが、「他の乗客」の立場に立って考えたとき、あなたはどう思いますか。

ア　何もしていない乗客を逮捕しろというのはむちゃくちゃな話だ。
イ　タバコを吸った男に注意もせず、注意した乗客を助けなかったのは悪い。
ウ　注意した乗客を助けなかったのは悪いが、逮捕されるほどではない。
エ　注意した乗客を助けて、同じように暴力されたら大変なので他の乗客の行為は理解できる。



ウ「傍観していた乗客は悪いが逮捕されるほどではない。」という生徒が各学年とも50%を超えている。また、ア「逮捕しろというのはむちゃくちゃ。」と考える生徒が2、3年生では20%近くいる。これらは、理由としてエ「同じように乱暴されたら大変」を選択した生徒も含めて、正義を行うことの重要性はわかるが、判断基準に別の要素をも含めて考えようとする生徒の意識の現れと理解できる。

3

バレーボールの夏季大会がありました。自分は選手として出かけなければなりません。しかし、試合時間の関係で掃除当番はできません。

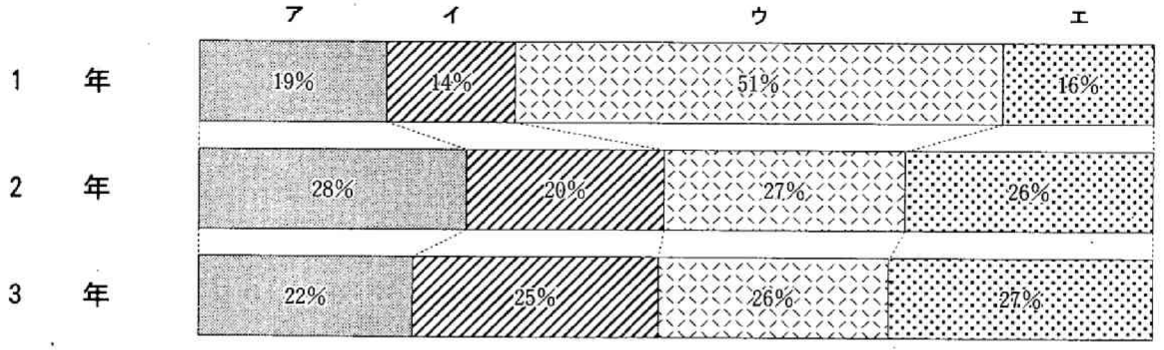
質問：あなたが選手なら、どのような気持ちで出かけますか。

ア　学校の代表として出かけるので、掃除ができなくてもしかたがない。

イ　他の人に掃除してもらってありがたい。

ウ　今日掃除をできない分は、明日の掃除当番でお返ししよう。

エ　掃除をしなくていいので得をした。



イ「ありがたい」、ウ「お返ししよう」と考え、感謝の気持ちや仲間意識の強い生徒の割合は1年生が最高で、2年生になると低下し、3年生になると再び増加する。そして、どの学年の場合も50%前後を占めている。「掃除をしないで得をした」という意識は、学年が上がるに従って増え、感謝の気持ちや仲間意識が弱くなっていくことを示している。

調査区域：町田市、青梅市、八丈町、江東区、品川区、大田区、荒川区、足立区、台東区

調査数　：1年生519人　　2年生453人　　3年生496人　　合計1468人

(3) 各学年の指導のねらい

—第1学年—

正義を重んじ、不正を増み、社会連帯の精神をもって互いに手を携えてよりよい社会の実現に尽くそうとする心情を育てる。

この時期では、社会や集団の在り方に対して理想を強く求めるようになる。反面、自己中心的な考えに固執したり、狭い仲間意識にとらわれがちである。そのため、不正と分かっていても「見て見ぬ振り」をしてしまうことがある。そこで、この時期の生徒には、自分が常に社会や集団とのかかわりの中で存在するということに目を向けさせ、よりよい社会や集団にするにはどうしたらよいかを考えさせることが必要である。その上で、自己中心的な考えや狭い仲間意識を排し、すすんで不正を正す勇気を持つことが、集団や社会を発展させるために必要なことを理解させることが大切である。

＜資料例＞　「まぼろしのホームラン」(私たちの生き方　S社)

—第2学年—

正義を重んじ、広い視野を持って人間理解を深め、偏見や差別のないよりよい社会を築き上げようとする意欲を育てる。

この時期は、社会の在り方に対して理想を強く求めるだけではなく、現在の社会に対して矛盾を感じ批判するようになる。そして、そのことも正義の実現だと感じ始める。しかし、その正義は、一人よがりの正義であったり、自己中心的なものであったりすることが、しばしば見受けられる。これは、自己の周辺でのできごとには、狭い視野や個人的な感情で自己中心的な態度をとったり、自己に直接関係ない場面では、無関心になったりすることに現れている。

そこで、ここでは正義を正しく理解し、だれに対しても公正・公平に接し、偏見や差別をもたないように指導することが大切である。

＜資料例＞　「偏見の厚い氷を破りたい」(自分をのばす　A社)

—第3学年—

正義を愛し、この世の中の偏見や差別を断固として否定し、社会連帯の精神をもって、よりよい社会の実現に積極的に尽くす態度を育てる。

この時期には、次第に社会性が身につき、社会の仕組みが理解できるようになってくる。しかし、その仕組みは観念的にとらえるだけでなく、多面的・多角的にとらえる必要がある。そして、社会がどうあれば対立や偏見・差別がなくなり、誰もが幸福な生活を送ることができるのかを考えさせたい。さらに、社会に存在する不正・不公平な言動を断固として否定し、よりよい社会の実現のために、積極的に努力するたくましい人間を育てることが大切である。

＜資料例＞　「兄」(G社補助資料)　　「筆」(中学生の新しい道　B社)

(4) 指導方法の工夫

① 資料選定の観点

第二分科会では、内容項目4―(3)「理想的な社会の実現」の指導に供する資料を資料選定のための基本的観点としては、中学校指導書道徳編（平成元年3月．文部省）P59に示された内容をふまえるとともに次の諸点に留意しつつ選定した。

(ア) 正義が一人よがりなものでなく、社会的なものが大切であると、とらえることのできる資料。

(イ) 正しいことを貫く勇気が、よりよい社会の実現につながることが分かる資料。

(ウ) 上記のことを生徒が自分自身で考え、自分の問題としてとらえることのできる資料。

以上の観点からいくつかの資料を収集・検討した結果、多くの学校の生活の中で起こりうる「筆」を選定した。

② 授業の構想

内容項目4―(3)は、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の中に示されている項目である。中学生になると、社会のしくみや在り方に理想を求めるようになってくる。しかし、それに反してこと自分自身に関わることとなると、自己中心的な考え方が強くなってくる。そこで、本資料を用いて、何事に対しても公正・公平な態度でものごとに臨み、偏見や差別を許さず、不正を見逃さず、正しいことを貫く勇気と積極的に実行する心を育てたい。

③ 資料の活用及び指導の工夫

授業を構想していく過程で生徒の実態を把握するためのアンケートを取り、そのアンケートの分析結果をもとに資料活用の方法を工夫した。内容項目4―(3)は、正義を重んじ、だれに対しても公正・公平な態度で接するということである。授業を展開するに当たっては、正義を実現することの喜びの面に着目させ、生徒一人一人がよりよい社会の実現に尽くすことを、生徒自身の生き方の問題と深くかかわらせて考えさせた。また、小集団による話し合いを持たせ、十分話し合わせた後に発表させた。さらに、この項目は、偏見や差別のないよりよい社会の実現というねらいも合わせて指導していく必要がある。

(ア) 導入

生徒自身の過去の体験を振り返らせ、そのときの気持ちや考え方なども大切にしながら資料に入った。

(イ) 展開

主人公の気持ちに触れながらも、田中君の気持ちにもスポットを当て、考えさせるようにした。授業の全体を通して、生徒の意見や考えを多く聞きあえるように工夫し、生徒自らの本音とたてまえを生徒自身に気付かせるよう配慮した。

(ウ) 終末

この資料について考え意見を出し合った後、過去に正しい事を正しい事として主張し、誰に対しても公正・公平にしようと思った事はないかを文書にまとめさせた。

④ 資料の内容

康夫は、親友の雄一から習字道具を借りた。それは、雄一と同じサッカー部に属する田

中のものであった。田中は、運動があまり得意ではなく、どこか弱々しい印象があった。

田中と親しくなった康夫が、二人で電車で出かけたときある一つの事件が起きた。田中は、康夫が子供料金で買った切符と康夫にあわせて買った自分の切符を精算所で精算し、不足分を支払ってきたのであった。そんなことがあってからしばらくして、もう一つの大きな事件がおこった。雄一が田中から借りた習字道具の中に、筆が入っていなかったのであった。怒る雄一に対して、田中は、人にものを借りて平気であるのが許せないと言うのであった。康夫も田中に習字道具を借りていた。田中の言葉を聞いて、康夫の顔から血の気がどんどん引いていった。

(5) 指導事例（第３学年）

① 主題名「正義」（公正・公平な態度　内容項目４―(3)）

② 資料名　「筆」（Ｂ社「中学生の新しい道２」所収）

③ 主題設定の理由

私たちは、他者とのかかわりにおいて生きており、よりよい社会の実現には、一人一人がともに手を携え築き上げようとする連帯意識と、公正・公平な態度が必要となる。この社会連帯の精神及び公正・公平な態度の中心は、正義を重んじる生き方である。正義を重んじるということは、「見て見ぬ振りをする」とか、「避けて通る」というような消極的な立場ではなく、不正を憎み、不正を許さず、正しいことを自ら積極的に実践に移せるようでなければならない。今日の社会状況や生徒の実態を考慮したとき、不正や不公平を見逃さず、よりよい社会を築こうとする気持ちを育てることは大切であると考える。

④ ねらい

正義を重んじ、誰に対しても公正・公平にし、よりよい社会の実現に尽くそうとする心情を育てる。

⑤ 指導過程

	学習活動・発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	1　生徒の生活体験を振り返らせ導入とする。 ○　教科書、授業道具等忘れたとき、今までどうしましたか。	○　友達から借り、先生に忘れたことを報告する。 ○　友達から借り、先生には黙っている。 ○　忘れたままにし、先生には報告する。 ○　忘れたままにし、先生にも黙っている。	○　忘れた時にどうしたか、ねらいとする価値への導入を図る。 （あまり深く聞かず、時間をかけないようにする。）
展開	2　資料を読み、主人公「康夫」の気持ちについて考え発表する。 (1)　雄一から借りた習字	○　又貸しをしていたなんて	（生徒に発表させる、

展	道具が田中のだと分かったときの、康夫の気持ちはどんなだったろうか。 補助質問 「え？おまえのじゃないのか」	図々しいやつだ。 ○　雄一のだと思っていたけど田中のだったのか。（あきれた。） ○　そんなにきれいに洗わなくてもいいとはひどいこと言うな。	5人位） ○　習字道具を借りていることに康夫も雄一も変わりない。 ○　雄一への非難に対し、康夫の利己的な面にも考えさせたい。（康夫への批判・弁護の立場に分け、考えを深めていきたい。）
	(2)　駅の精算所で田中に「～気持ちよくいこうよ」と言われ、康夫がなんとも言えない気持ちになったのはどうしてだろう。	○　こんなことするなら最初から大人料金を払って入った方がよかった。 ○　やっぱり、まずいことをしたなあ。 ○　うまくいったのに、わざわざ払うこと無いのに。 ○　こいつ小心物だな。 ○　真面目な奴だな。 ○　裏切り者だ。 ○　いい子ぶって。 ○　偉いなあ。	（生徒に発表させる、7人位） ○　正しいことを行っている人に対して、自分の立場や損得から素直に認められず不満を持ちがちな生徒自身の心を問うようにしたい。
開	(3)　顔から血の気がどんどん引いていったときの康夫の気持ちは、どんなだったろう。 補助質問 言われたのは雄一なのになぜ血の気が引いてしまったのだろう。	○　間違ったことをしてはいけないということをはっきりと教えられた。	（生徒に発表させる、10人位） ○　生徒の多様な反応が得られるようにしたい。 ○　田中の正義を重んじる言動について、康夫の立場から考えさせていきたい。 ○　不正を見逃さず、公正・公平にしようとする人間としての心を感じとらせたい。
	3　正しいことを正しい		○　生徒にこれまでの

終末	こととして主張し、誰にでも公正・公平にしようと思った経験について発表し合う。 ○　正しいことを正しいことと主張し、誰にでも公正・公平にしようと思ったことはないだろうか。その内容とその時の気持ちを文章にし発表してみよう。	○　バスに乗ろうとした時、割り込みをする人がいた。何もできなかったけど注意した人がいて、気持ちがすっきりした。	の経験や体験を通して感じたことを書かせる。 ○　自分にも不正を許さない心があることを感得させたい。

⑥　評価の観点

生徒が書いた文章の内容に正義を重んじこれを守り、不正を不正として敢然と退ける心情が含まれているか。

⑦　生徒の感想カードから

○　悪いことを「悪い」と言うときにすごく勇気のいることだと思う。だけど、学校で清掃しているときに、いろいろな理由を言ってさぼってたりした人がいた。勇気をだしてっていうか、友達だったから、遠慮せずに注意すると、結構素直に聞いてくれたので悪いことがあたりまえになってしまう前にきちんと注意したほうが、こっちも気分がよくなるし、相手は悪いことしたなってことを気付いてくれると思うので、自分の気持ちははっきり言ったほうが良いと思う。　（男子）

○　友達と一緒にいるとき、悪いことだからやめようと言うことができなくって、誘われるままにちょっとしたことをしてしまったことが、小学校のとき何度かありました。悪いことと分かっていながら、断ることができないでやってしまった時、本当にいやな気持ちでした。どうしようどうしようと思って、なんだか息がつまってしまいます。そんな時、「やめよう」と、一言いうことができればと思います。中学生になってからは、そういうことはよくないと１・２回だけど言えたことはあります。そんな時はなんだかとても気持ちのいいものです。　（女子）

⑧　考察

本授業を通じて、正義を重んじだれに対しても公正・公平にし、厳然と退ける心情と偏見・差別のないよりよい社会を築き上げようとする意欲を育てるねらいがあった。上記⑦の感想に見られるように正義を貫く考え方や態度は、ある程度深まり達成できたと考えられる。しかし、偏見・差別のないよりよい社会を築くという社会連帯の精神までは本授業において感じさせるところまで結びつけられなかった。この内容に気付かせ考えさせるためには、もう少し発問の工夫や補助資料などを活用する必要があったのではないかと思われる。また、この授業を通して深まった考え方が定着し、今後道徳的実践力となり、生きて働く力になるかが課題である。

3　まとめ

第２分科会では、内容項目４―(3)「正義を重んじ、だれに対しても公正・公平にし、社会連帯の精神をもって差別や偏見のないよりよい社会の実現に尽くすように努める。」について研究を進めてきた。

人は、常に社会的な存在であり、その社会の中でよりよく生きていこうと努力している。しかし、全ての人が平等で、何の差別もなく、社会連帯の精神に基づく理想的な社会はなかなか実現されず、悩み苦しむ人も多い。それは、人が社会的な存在でありながら、自我をもった主体的存在でもあるためである。人が他の人と対峙したとき、少なからず優越感や自負心、劣等感や嫉妬心をもつ。それは人が持つ、人より優れたい、社会的により認められたいと思う気持ち、すなわちよりよく生きようとする人間本来の切なる欲求によるものである。人はこの本能によって創意工夫を繰り返し、様々な文明や文化を築いてきた。しかし、この本能が歪んで現れたときには、人を蹴落としてまでも自分を優位に位置づけようとする意識や行為、偏見から生じる差別や不公平が起きる。よってこの問題は、人間の本能という根源的なところから生じており、私たち人間の普遍的な課題であると言える。

中学生の現実を見ても、広い視野で世界を見る目が養われ、社会の不正や、不条理に対して憤りを感じ理想的な社会を望む反面、自分に身近な集団の人間関係の中では様々な不公平や差別的な態度を容認してしまっている面がみられる。そのような生徒の実態をとらえるために、アンケート調査を行った。

調査を考察してみると、現在の中学生は、学年が上がるにつれて「社会連帯の精神が薄れ公平さや正義感が弱くなる」、さらに「積極的に理想的な社会を築いていこうとする勇気や実践力も弱い」などの実態があることが分かった。そしてその根底には、自分本位であったり、自分が所属している集団への狭い仲間意識が強くあることも分かった。

このような調査結果から、各学年のねらいを定め資料の活用を工夫した。資料の選定に当たっては、生徒の生活で起こりがちな場面設定がなされていて、生徒が自分の生活を重ねてねらいについて考えられるものや、深く社会に現存する偏見や差別について考えることのできるものを取り上げることにした。これらの資料を通して、社会を構成する一人一人が全て尊重され平等に認め合い、生きる喜びを感じる社会の実現に尽くすような正義に裏打ちされた道徳的実践力を身につけさせるため、指導の方法について授業を通して深めた。

内容項目４―(3)は、「主として集団や社会に関すること」という視点に含まれる内容の基本の一つに位置づけられると考えた。全ての偏見や差別を打破し、誰もが正しいとする正義を成員が連帯感を持って推進したならば、公正・公平な人間関係で結ばれた理想的な社会が成立する。このような社会ならば、成員一人一人がお互いに役割と責任を果たし、権利を行使し、義務を果した上で、他者への奉仕の心を次第に花開かせ、家庭、学校、地域社会、自国しいては世界の平和と人類の幸福に貢献していくことにつながっていくと考える。また、項目の内容も、全体的に一つの価値と言えるが、正義、公正・公平、偏見・差別、社会連帯の精神と、全ての内容を網羅した指導は難しく、今後の研究の課題になった。

さらに、「真理」を主題とした１―(4)の項目や、「人間愛」を主題とした２―(2)の項目、「生命尊重」を主題にした３―(2)の項目ともあわせて考える必要を感じた。

Ⅳ　まとめと今後の課題

二十世紀から二十一世紀へ向けて、今の物質社会は更に進んでいくであろうと予想される。そんな中で、万物の霊長としての人間が、その尊厳を守っていくためには、豊かな心を育て、人間が人間らしく生きていくことが大切である。中学生という時期は、自我を確立し、自己の生き方を模索しながら、多くのものを吸収していく時期である。そんな時期だからこそ、豊かな心を育て、人間としての生き方への自覚を深め、主体性を育てていくことの意義は大きいと言える。

本年度は、第一分科会が内容項目３―(1)「畏敬の念」を、第二分科会が内容項目４―(3)「理想的な社会の実現」を取り上げた。そして、それぞれ研究主題の明確化に努め、道徳の時間の充実を目指して研究を進めてきた。具体的には、ねらいとする価値の内容を分析、整理するとともに、資料の収集及び選定と活用の工夫を行った。また、アンケートなどを通して生徒の実態の把握に努め、授業研究を通して生徒の実態に即した授業の在り方について研究を進めた。

今回の研究では、第一分科会は、自然や美しいものに感動する心を通して、人間の力を超えたものの存在を知ることで、自然を含めた周囲との関わりの中で生きていく人間の生き方を、第二分科会では、人間関係や社会との交流の中での心の在り方を通して、社会との連帯感をもつことで周囲との関わりの中で生きていく人間の生き方をそれぞれ求めていっている。いずれにしても、人間が人間として生きていくには、周囲との関連なしではいられないということでは一致している。これを出発点として、両分科会では、内容項目のとらえ方について、深く検討を加え、結果を構造図として表した。

実態調査は、各研究員の所属校でアンケート調査を実施し、その集計結果に考察を加え、各学年での指導のねらいとしてまとめた。また、資料選定に当たっては、内容項目の指導にふさわしいもの、生徒の実態に即したもの、または様々な角度から多面的に考え方を深められる、親しみやすいものなどの観点から資料を収集し活用した。また、研究員による自作資料もいくつか創作され、実際に授業も行った。

授業研究と、資料の活用方法を通して、効果的な授業には、改めて日常生活における教師と生徒との人間関係、信頼関係がいかに大切であり、また、それを前提として、道徳の授業が成立するということを再認識した。また同時に、教師による生徒理解の大切さや、内容項目をあらかじめ深く理解しておくことがいかに重要であるかということも学んだ。さらには、資料が生徒一人一人にとって身近な存在であること、生徒自らが主体的に考えていけるようにするには、教師の体験談を有効的に利用すること、教師が生徒と共に考え、生徒自身の成長を助けていく存在であるという認識を与えることが大切であるということも学んだ。

道徳の時間の指導を通して生徒の道徳的価値観を形成し、人格の内面的充実を図るだけでなく、学校の全教育活動を通して行われる道徳教育も重要な役割を担っている。二十一世紀に生きる生徒たちが、人間としてのよりよい生き方を自覚し、自ら主体的に生きていく力をつけていくには、今後、学校での全教育活動を通して行う道徳教育の充実を図るとともに、学校・家庭・地域社会の三位一体の教育力の充実を図っていかねばならない。今回の研究では、まだ十分達成できなかった「人間としての生き方の自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導の工夫」についても、さらに研究を重ねていきたい。